No. 7

2021年10月
［編集・発行］
上内田地区まちづくり協議会 広報部

広報 ふれあい上内田

小笠山 六枚屏風 ―― 雨水の浸食で出来た沢（上内田上板沢）

【画像引用】 絶景かなドットコム

上内田 活動風景いろいろ
学童保育所への通学路 整備
懐かし風景 上内田
ふる里再発見〈第7回〉段金谷
編集後記

上内田 活動風景 いろいろ

コロナ禍でも注意を払って
楽しく充実した活動をしています。

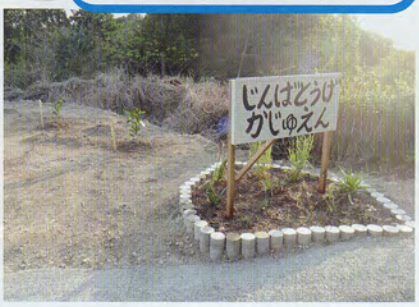
4/10(土) まちづくり協議会総会

4/20(火) 学習センター総会

6/15(火) 自主防災会長会

6/9(水) 趣味の友 切り絵

5月 ボランティア部
陣馬峠果樹園整備



6/9(水) 健康体操 あざみ会

7/3(土) いきいきサロン

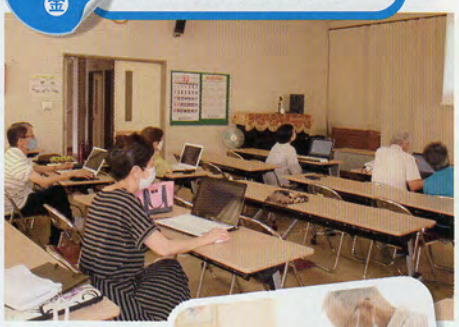
ちょっと寄り道 散歩道の山羊たち

子ヤギも産まれて親子で
仲良く暮らしています。
食欲旺盛です。

桶田信号機の南
田んぼの中

マンリュウ造園西側
ソーラーパネルの下

7/9(金) パソコンクラブ



小学校から学童保育所までの安全な通学路が山際に整備されました

学童保育に通う子供たちは、小学校から学童まで県道小笠掛川線を歩いて通っています。道幅が狭く、歩道も無く、交通量が多いのでとても危険で、雨の日は水たまりの中を歩いていました。長年改善の要望をしてきましたが、なかなか実現しませんでした。

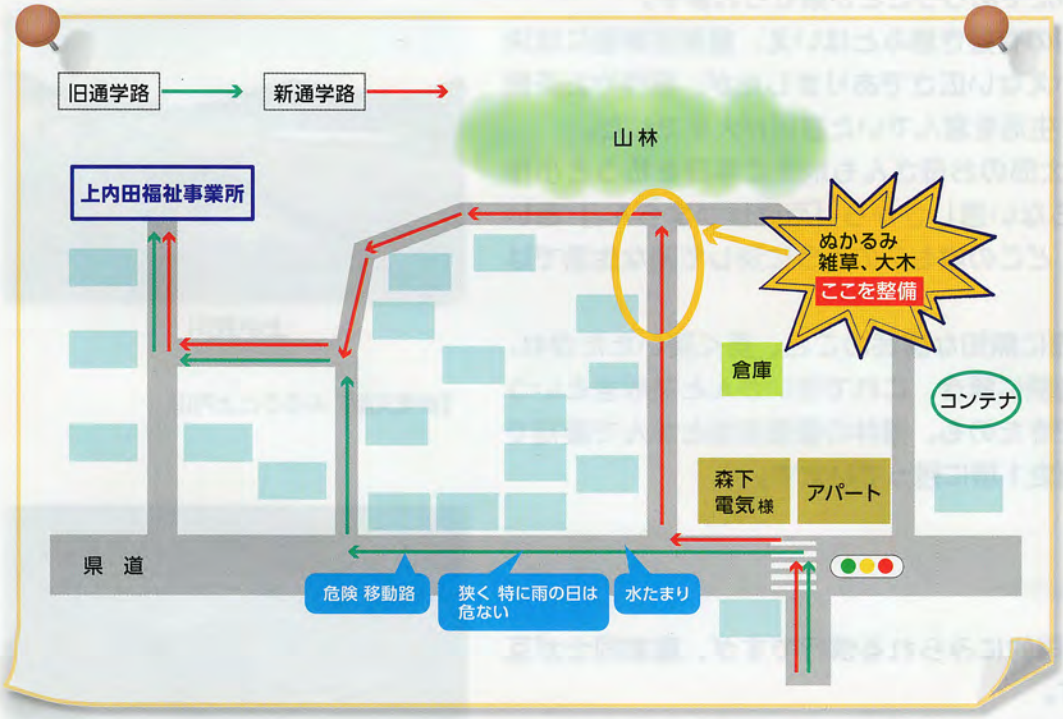
今年、社会福祉協議会・まちづくり協議会・学習センターで協議し、保護者の皆さんのご意見も伺いながら、地権者の皆さんのご理解を頂き、信号機から県道を通らずに学童まで行ける通学路を整備することになりました。

８月の夏休み中に道路の整備や草木の伐採が終わり、夏休み明けから、子供たちは毎日安全に通学することができます。

ご協力頂いた皆さん、ありがとうございました。

今までの通学路

道沿いの木々の剪定と草刈り



整備された新しい道

新しい道の通学風景

通学路のトンボ・花

懐かし風景 上内田

小笠川水系

“人類の住みはじめは水辺から”といわれますが、当上内田地区を考えると、菊川の支流としての小笠川、そのまた支流として、上小笠川と栗原川があげられます。

上小笠川沿いに、田島・桶田・段金谷・大谷・和田・下板沢。そのまた支流の五百済川沿いには五百済が、もう一つ支流の板沢川沿いに上板沢があり、やはり小笠山から流れ出ています。

栗原川は子隣・岩井寺とさかのぼって小笠山に源を発しています。こうした川と山の地形から谷田が多く、平野は、上小笠川を中心として現在の県道掛川・相良線沿いにあるものが一番広く、この平野は、小笠山から流れ出る上小笠川によって作られたものでありましょう。

上小笠川は、河川改修によって昔から比べると堤防もしっかりしたものとなっていますが、地名等から古い時代には、この平地のあちこちで流れを変えていたであろうことが察せられます。

川沿いの田畑は小笠川の有難き恵みとはいえ、農業従事者には決して十分な耕作面積といえない広さでありましたが、稲作やお茶栽培を主に農業に従事して生活を営んでいた農民が大半でした。

上板沢の俳人 松本一太郎のお母さんも地主に年貢を払うと小作は半年分のお米しか残らない苦しさから「百姓はつまらん。」といつも言っていたように、どこの家もこのように決して楽な生活ではなかった事でしょう。

地域特産のお茶も商売に無知な農民のこと、安く買いたたかれ、横浜で取引されている金額に驚き、これではいかんと益収舎という農業共同組合の先駆ができたのも、福井の養蚕産地と並んで最初であったと協同組合の発達史１項に残っています。

栗原川

上小笠川

【参考文献】ふるさと上内田

結（ゆい）

『結』は農村社会で全国的にみられる慣行ですが、農家同士が互助的に行う協同作業です。

特に多いのが、田植えのように集中的に短期労働力を必要として家族労働だけでは足りない場合に、複数の農家が労働力を出し合い、それぞれの家の田植えを順番に行っていくというものです。いわゆるお手伝いとは違い、互いの助け合いを目的とします。

当上内田地区でも田植え、稲刈り、脱穀作業などの農作業の他、家屋の藁ぶき屋根の解体、山林の木材の伐採、運搬等家屋の建て替えに伴う作業も行われ、『結』が用いられたところもあります。

共同作業を行なう間柄としても、本家と分家、親戚関係、気心のあうもの同士、さらには、集落のほとんどが『結』に参加する場合等、様々な形態があったようです。

結

半世紀前、我が家の母屋も古い藁ぶき屋根の解体の際は、組内の人たちが解体してくれ、顔のタオルを外すと、目の周りが真っ黒でパンダのような顔になっていて「よくぞ、よその家のことをそこまでしてくれるものだ」と子供ながらに感動した事を鮮明に覚えています。

『結』の共働作業の契約は文面ではなく、口約束がほとんどで、このことからもかつての農村社会における人間関係がいかに厚かったかがうかがえるところです。そうした人間相互間の信頼の上に成り立ったもので、１日の労力には１日の労力を返す形を取り、金銭や物品で相殺することがないのが通例のようでした。

相互間の労働力の提供、共に汗を流すことが、『結』の基本原則であり、人々の思想の根底に、金や物以上に人の労力と責任感を重んじる精神が存在したからこそ、この慣習が発達し、長年にわたって継承されてきた結果につながったものと思われます。

『結』にみられる先人の思想は、正しく人間主義・連帯主義を貫こうとするものであり、生き生きとして温かみのあった、かつての農村社会の基盤石となっていたに違いないと思われます。

今、こうした『結』も、貨幣経済が浸透し、雇用労働や機械化により農作業の体系も変わってきて、現在ではほとんど消滅しています。少子高齢化の現代にあって、人々の助け合いに支えられた温かい地域づくりを考え、福祉の進展に取り組もうとするとき一番重要なことは、まさに『結』にみられる人間主義と連帯主義の思想を回復することにある、と思うところです。

藁ぶき屋根解体

脱穀

【参考文献・画像引用】
茨城県桜川村飯田村長随想

お日待ち・かいぼり

きつい労働を癒すのは田植え後の早苗饗（さなぶり）、結いによる共同作業の終了後は、皆集まって宴会『お日待ち』です。実に楽しい笑顔あふれるひと時です。親睦は更に深まります。

農村地区の娯楽は少なく、子供は山に登って山の幸（栗・椎の実・柿・椎茸・筍・蕨等）を取ったり、川や池での魚釣り・コウロン仕掛け・仕掛け網での魚とりなどに興じていました。田植え時期には水をため池から抜いて田に入れるためにあちこちの池の水が抜かれて、「どこそこの池で『かいぼり』が何時からある」と、人伝いに伝えられます。鯉や鮒・ウナギを沢山捕まえることが出来るので、大人も子供もお祭り騒ぎで池に集合して採りあったものです。この時は沢山、魚や鰻が食べられます。

かいぼり

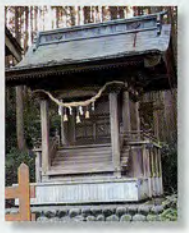
お日待ちだ〜！！　（写真はイメージです）

ふる里再発見 第7回 3区 段金谷

今回は「若一王子神社」と「内田三郎家吉の墓」についてご紹介します。

若一王子神社

王子神社は、若一王子神社と言います。天忍穂耳命（あめのおしほみみのみこと）をお祭りしています。応永年間（1396～1427年）の頃から、何人かのお坊さんが大般若経をうつしてこのお宮に納めました。昔は神仏習合だったためです。このお宮には木彫りの仏像3体と共にこの般若経がありました。般若経は30巻を1つの木箱におさめ、その木箱が20個ありました。般若経を書いた人、書いた日 等が記され、“遠州城東軍内田郷一之宮若一王子御経也”と記されています。



こうしたことから、この王子神社は無資格だけれども、昔から信仰の厚いお宮だったことがうかがえます。若一王子神社は「段」村の神社ですが「桶田村」の祇園神社「金谷村」の天神社「田島村」の熊野社「和田村」の白山社　合計5か村の総本社でした。

内田三郎家吉の墓

佐々木四郎高綱（桶田 佐々木行男さん宅のご先祖）は源義経に従って出陣し、木曽義仲を滅ぼしたと言われています。

内田三郎家吉は、寿永3年（1184年）佐々木高綱と一緒に義仲との戦いに出陣し、粟津の戦いの時に義仲の側室の巴御前に討たれたと言われています。（木曽義仲は、寿永3年正月20日粟津で戦死）

※源平盛衰記という本に「元暦元年（寿永3年と同じ年）正月 遠江国住人 内田三郎家吉……」云々と記載あり。

大正2年8月21日、石井麻吉先生の書いた「郷土地史稿」に、“本村、大字上内田、字王子山に、古墳が一つあり、昔から内田三郎のお墓だと伝承されている”と記載されていますが、本当の事はわかりません。また、「遠江国風土記」という本には笠原荘内田豪（かさはらのしょううちだごおり）と記載されています……。今も、内田三郎のお墓としてお祀りしています。

伝えられるところによると、わが郷土上内田は養老の頃（1300年前）、山城の国から佐々木五郎衛門桶田殿がやってきて、始めて今の上内田地内に住居を定めました。それでその辺の田地を桶田垣戸と呼び、後には桶田というのが地名の元となったといいます。その後延歴元年（1215年前）、遠江国住人内田三郎家吉が来て、住居を構え相当栄えたので、その姓を取って「内田上の郷」と言っていたそうです。又文治年間（約830年前）京都北の天満宮社掌の栗田治太夫義次（よしつぐ）栗田庄司氏祖先が同地より現在の金谷に転住し、菅原道真を天神社に祭り長く住んでいたとのことです。

【参考文献・画像引用】ふるさと上内田

編集後記

コロナも変異を繰り返し、8月には第5波が到来し、感染者も最大と収まるところが見えません。ワクチン接種がもう少し進んで、安心してコミュニケーションが取れる日が、待ち遠しい限りです。そんな中、多くは無観客で実施されたオリンピック・パラリンピック競技ではアスリートが多くの感動を与えてくれました。日々一刻も無駄にしない正精進道の賜物、つくづく見習いたいと思います。

〈本誌の掲載内容について〉参考文献などによる一説であり、諸説ある場合があります。